

[成果情報名] 一番茶芽出し肥への有機液肥使用による収量・品質の維持・向上

[要約] 一番茶芽出し肥として有機液肥を使用することで、減肥下においても一番茶収量および品質を維持することができる。また、乗用型防除機を活用することで、効率的に有機液肥を散布できる。

[キーワード] チャ、有機液肥、芽出し肥、収量、品質、乗用型防除機

[担当] 農林技術開発センター・農産園芸研究部門・茶業研究室

[連絡先] 0957-46-0033

[区分] 茶

[分類] 普及

[背景・ねらい]

茶の減肥栽培が進む中、より肥効を高め収量・品質を確保する上で液肥の施用は有効な手段である。しかし、液肥の点滴施用は配管施設の整備等が必要であり普及が進んでいない。そこで、現地で導入が進んでいる茶乗用型防除機を活用し、一番茶芽出し肥にのみ有機液肥を用いる効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

一番茶芽出し肥としての有機液肥使用は、以下の特性を有する。

1. 減肥下(N-45kg/10a)であっても慣行施肥(N-55kg/10a、芽出し肥:硫安)と比べて一番茶芽の生育は優れる(図1)。
2. 一番茶は慣行施肥と比べて同等またはそれ以上の全窒素含量を確保できる(図2)。
3. 一番茶は慣行施肥と比べて生育による粗繊維(NDF)含量はほぼ同等に推移する(図3)。
4. 一番茶の目標収量である 650kg/10a に達した時の出開度は慣行施肥より低く、荒茶品質は向上する(表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 液肥の施用は茶乗用型防除機に散布用アタッチメントを装着して茶樹株元に施用し、10aあたり 3,000 ㎡を1～1.5時間で散布することができる(ながさき普及技術情報第27号)(写真1)。
2. 慣行施肥(年間窒素施用量 55kg/10a)に対し、年間窒素施用量 45kg/10a で実施した結果である。
3. 液肥は市販の有機液肥(N:P:K:Mg=10:5:6:1)を使用し、芽出し肥として一番茶萌芽期に、10aあたり窒素量 4.5kg を3,000 ㎡に希釈して散布した。
4. 施肥は年間窒素施用量に対して、春肥:30%(2回分施)、芽出し肥:10%、追肥1回目:15%、追肥2回目:15%、秋肥:30%(2回分施)、計7回に分施し、春肥及び秋肥は有機配合肥料、それ以外は硫安を使用した。

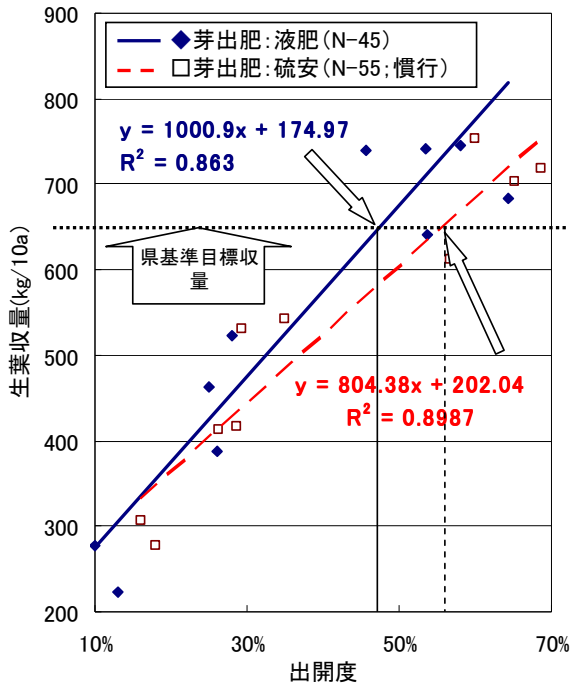


図1 芽出し肥の違いによる一番茶出開度と生葉収量の推移（3ヵ年）

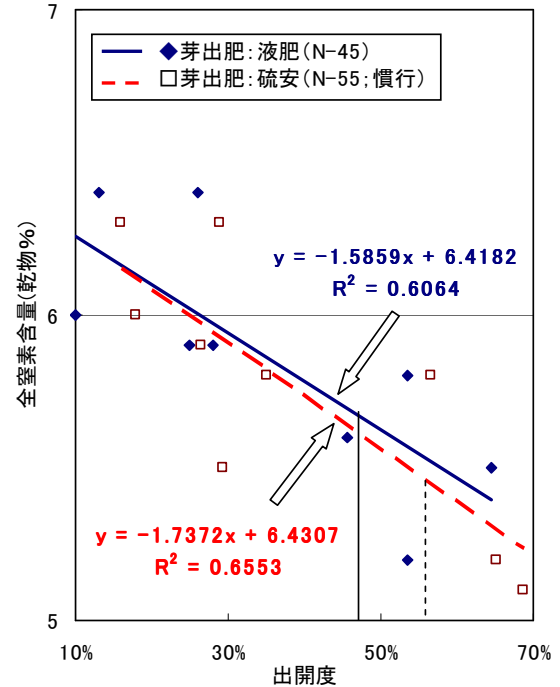


図2 芽出し肥の違いによる一番茶出開度と荒茶中の全窒素含量の推移（3ヵ年）

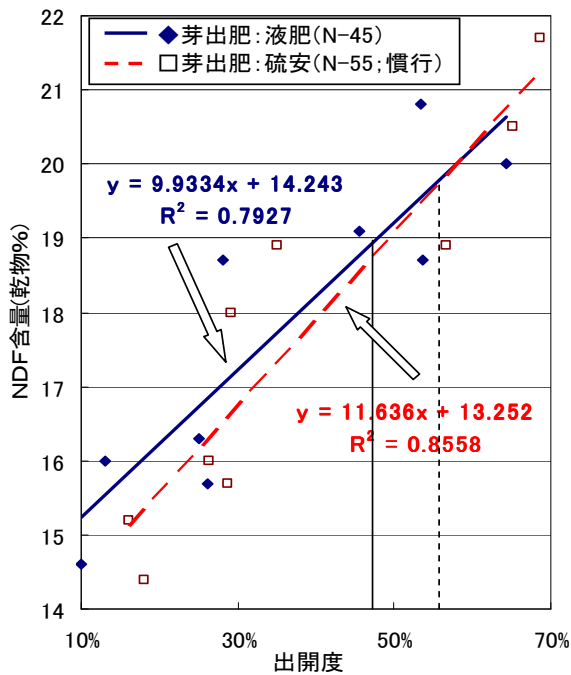


図3 芽出し肥の違いによる一番茶出開度と荒茶中のNDF含量の推移（3ヵ年）

表1 一番茶収量 650kg/10a に達した時の出開度と荒茶成分（推計値）

	出開度	全窒素含量	NDF含量	NF値
	%	乾物%	乾物%	
液肥(N-45)	47 (85)	5.7 (104)	18.9 (96)	0.300 (109)
慣行(N-55)	56 (100)	5.5 (100)	19.8 (100)	0.276 (100)

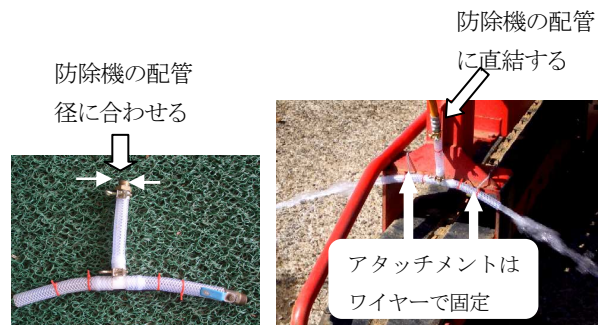


写真1 散布用アタッチメントと乗用型防除機への装着図

[その他]

研究課題名：飲む人・作る人に安心な茶生産技術の確立
 予算区分：県単
 研究期間：2006～2008年度
 研究担当者：野田政之、山口泰弘